



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第23号

徳島 1916年2月16日

在外ドイツ人（5）

北アメリカだけでなく、南アメリカの諸国にも大量のドイツ人移住者が一時的に引き寄せられていった。とりわけブラジルがそうであり、この国に今日では44万人のドイツ人が生活している。そのうち40万人以上が農業を営み、彼らは特別な入植地にほぼまとまって住んでいる。彼らはブラジルの一地方であるサンタ・カタリーナに諸都市を建設した。それらのうち最大の都市として、ブルーメナウを挙げることができる。これらブラジルに移住したドイツ人は、あらゆる点でドイツ人氣質を保持することを心得ており、ドイツ人学校、ドイツ人教会、ドイツ語新聞等を持ち、純粹にドイツ人としての感覚を持っている。

ドイツ人入植者は目的意識をもって倦まずたゆまず働き、一定の豊かさを手に入れたが、彼らはブラジルの当該地域をドイツ帝国が入手するため

の単なる尖兵に過ぎない、との疑いをしばしばかけられている。残念なことにそのような誹謗のため、これから先ドイツ人がまとまって入植地を作ることが禁じられてしまった。当然そのことによって、われわれの農夫たちが自分たちの子どもをドイツ語で教育し、ドイツ人として育てることがより困難になっている。

アルゼンチンには、およそ2万人の帝国ドイツ人と1万3千人のオーストリア人、そして1万5千人のスイス人が住み、彼らは6千人以上の生徒を有する100以上の学校を設立運営している。

南アメリカと中部アメリカの全ての国では、ドイツ人が多少なりともいるが、その数は何といても少ないため、彼らについてここでは取り上げない。南アメリカと中部アメリカに住むドイツ人は、今日われわれ全てと同じく、自分たちのかつての祖国がこの戦いに勝利を収めるのを見たいと願望している。このことについて殊更ここで言及する必要はない。

オーストラリアは、われわれドイツ人入植者にとってそう魅力はなかった。この大陸で生活しているドイツ人の数は、10万と見積もられている。しかし、この大陸の大部分には、もはやドイツ人氣質が入り込む余地はない。そこはイギリス気質が満ち溢れているからである。「オーストラリア人のためのオーストラリア」とのオーストラリア人の今日のスローガンは、ドイツからのこれ以上の移住をあまり容易にするものではないが、われわれにとってそれでかまわない。というのは、オーストラリアへ移住する者は誰でも、良かれ悪しかれドイツ人らしさを失ってしまうからである。

アフリカでは南部のみが移住地として考慮の対象となり、すでに17世紀に、当時はオランダ領であったが今日はイギリス領となっているケープ植民地へ、ドイツ人が移住した。南アフリカのドイツ人は、大部分が同じ系統の低地ドイツ語を使用する住民に吸収された。ポーア人の数がイギリス人のほぼ倍を占めているイギリス領ケープ植民地の雰囲気は、戦争勃発時二分されていた。先のポーア戦争のときに戦功のあった人々が上層部にいる政党は、ドイツ植民地への攻撃に断固反対した。しかし、最終的にイ

ギリスに友好的な政党が勝利し、かつての反英ボーア人指導者のボータ首相の指揮下にある南アフリカ軍が、少数のドイツ人集団によって英雄的に守られていた南西アフリカのわれわれの植民地に対し、略奪作戦行動を行うまでもっていったのである。

以上で、われわれのテーマは終わりである。しかし、ここで特には取り上げなかった国にも、大部分は、入植者としてではなく商人としてドイツ人たちが生活している。彼らは、ほとんど外国に居を構えて住みつくのではなく、折に触れて外国での住まいを畳み、かつての祖国で新たに生活を始めたり、可能であるならば少なくとも晩年をドイツで過ごしている。

われわれが描いた像は必ずしもバラ色ではなく、残念ながらドイツ人社会が幾多の後裔を外国への移住で失ったことを見ねばならなかった。しかし、今は困難な時代を経験しているが、外国に住んでいるドイツ人を祖国に二倍に固く結びつけることに成功する日が来ることを期待してよいであろう。

こうしたこととの関連で確認できる最も喜ばしいことは、われわれの政府が、以前には外国に移住した過剰人口を自国に引きとめることに成功したことである。そこで、4千万であったドイツ国民は、帝国建設以降約7千万人に増加することができた。

日本の神と神話（最終回）

地蔵とならんで、子どもを守る神である鬼子母神がいる。鬼子母神は改心する前、仏教の首都であるバーヤーグリハの子どもを全て貪り食うという誓いをたてていた。お釈迦様は、その神が哀れな子どもたちの肉の代わりにザクロの実を食べたくなるようにさせ、そのことによって彼女が誓いに背くよう仕向けることに成功した。彼女は尼となり、かつて食べ尽くそうとした子どもたちの保護を引き受けた。彼女は一方の手にザクロを持

ち、子どもを抱いた美しい姿をしている。広く一般に崇拜されている神が金毘羅である。以前この神は仏教徒によって崇められ、その神を祀った寺院が国じゅうにある。神道主義者は仏教に対する闘いに際し、金毘羅あるいは琴平はももとは神道の神であることを見だし、金毘羅のあらゆる神聖な場所を掌握した。その最も古くかつ最も有名な社は、ここから丸亀へ行く途中の琴平という同じ名前の場所にある。その社には、年間およそ90万人の巡礼者が訪れる。

天と地には、神々の他に、想像上のたくさんの生き物が住んでいる。樹木が生い茂る山々では、天狗が悪事を働いている。彼らは人間とは異なって、この上なく長い鼻を持ち、そのなかの特殊な者は、鳥の嘴と短い翼を持っている。それらは概して人の邪魔をしないが、しかし資格もないのにそれらの領域内に侵入した場合だけは、そうした向う見ずな者をずたずたに引き裂くのである。

仏教寺院のなかの最も美しい存在者が天人である。彼女らは、われわれの天使と同じく天国の住人である。彼女らの絵がしばしば等身大で寺院の天井と壁に画かれているが、彼女らは長い衣をひらひらとなびかせて、浮遊しているように見える。彼女らは、全ての望みが実現される喜びの絶えない暮らしを送っている。しかし至福が尽きた時、彼女らは崇高な姿を失い、今までの居所を後にする。

地獄では、当然のことながら鬼が職務を司り、時々現世にも赴く。われわれが中国で出会った一般によく知られた生き物が、竜である。円のなかに置かれた二つの竜は、男性原理と女性原理、すなわち陽と陰のシンボルである。二つの竜が互いに並べられる時、雄竜は上昇する竜で、雌竜は下降する竜となる。二つの竜は相対する全てを、すなわち善と悪、強さと弱さ、明るさと暗さを表している。個々の竜の絵は、多様な方法で活動する自然の力を表すものとして、幾種類もの意味を持っている。それは、昇る太陽、善行、賢明さ、強さのシンボルである。時代が進むにつれ、竜についての正式な系統学が形成された。

善人、賢者、権力者、これらのシンボルは雄竜に似て、赤い鳳凰、すなわちクジャクとキジの間の子であり、本質面では不死鳥と似ている。最後に、寺院の飾りに用いられている麒麟についても言及したい。それは、頭は竜で体は鹿、額に角があり、時々は翼を持っている。ここで取り上げたのは主だった神だけであり、全部の神について言及してはいない。それは、あらゆる寺院に見られる石や青銅、あるいは木で造られたたくさんの像のうちのいくつかを理解し、それと同時に、日本の思想世界についてのイメージを少しでもはっきりさせたいためである。

第4回演劇の夕べ

徳島、1916年2月27日

エドゥアルト・フォン・バウエルンフェルト

『日記』

2幕喜劇

登場人物

ラシュラー 弁護士

彼の妻

ルーシ 彼の被後見人

ヴィーゼ大尉

ボルン少尉

ラシュラーとヴィーゼに仕える召使い

第1幕は弁護士ラシュラーの家が、第二幕はフリーデナウのヴィーゼの屋敷が舞台となる。

7時30分開始

上演時間1時間15分

『日記』の初演は、1836年11月29日、ウィーンの帝立王宮劇場においてであった。それは好ましく色っぽい喜劇で、その喜劇の世界については、『活人画』と『奉公人』によってわれわれの知るところである。登場人物たちは互いに上品にお喋りするし、ウィットに富んだ言葉でわたりあう。しかし、そうした争いを、愛すべき詩人は再三再四最後にはとりまとめる。運命はちょっとした争いでは本気になれないのだ。これがエドゥアルト・フォン・バウエルンフェルトの芸術である。彼は己をわきまえていて、心をゆさぶる悲劇、それどころか深刻な葛藤すら描けないことを感じている。彼は自らの才能に託せるものを知っていた。そして、彼は自分が創り上げたものによって立派に任を果たしているのである。彼の戯曲は才気に溢れ、フランスの古典的喜劇を思わせる優雅さで書かれている。そこで、彼は娯楽的なドイツ喜劇の父となった。

バウエルンフェルトの生涯の主要な部分は、父なる町ウィーンの名前とつながっている。彼は1802年1月13日にここで生まれ、1890年8月9日にここで亡くなった。少なからぬ数の快活で優雅な戯曲、とりわけ喜劇は、晩年に彼の名前を不動のものにした。彼のその他の作品として、『告白』、『市民的でロマンチック』、『集いから』、『危機』そして『モダンな若者』がある。

上演前の舞台稽古のため、午後には大広間から立ち退くよう願います。
プログラムの販売はこれまでの上演と同じです。

演劇部

コンサート

軽音楽の多くのファンにとって非常に喜ばしいことに、比較的長い休みの後、再び「ポピュラー」コンサートが先週の日曜日に催された。故郷か

ら楽譜が送られたことによって、われわれのオーケストラの最近のレパートリーは著しく増えた。そこで日曜日の曲目は新しいものだけが並んだ。

特に価値あるレパートリーは、『カルメン』と『ランメルモールのルチア』である。『陽気な農民』も、今日からはきっとオーケストラの人気曲になるだろう。わが楽団には当たり前のことだが、豪華なプログラムの演奏はすばらしかった。

チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

第 89 問の解答

1 Lh8 - a1 任意の手
2 D か S で詰み

第 90 問の解答

1 Dh2 - g1 b5 - b4
2 Le7 x b4 Ka4 x b4
3 Dg1 - d4 詰み
1 Ka4 - b3
2 Dg1 - g8 + など

正解を送ってくれたのは、ヨーゼフ・ヴェーバーである。

第 91 問

白：Ka6, Da3, Te8, Sd6, g6, Bc2, c6, g4
黒：Kd5, Se7, Ba4
2 手詰め

第 92 問

白：Ka4, Dc2, Lg5, Sb5, d7, Ba3, b4, f3, h5
黒：Kd5, La8, Sf2, Bh6, d6, e7, f4, g3
3 手詰め

図書室

神戸の救援委員会から以下の書物が到着した。

- | | |
|-------------|----------------|
| P. O. ヘッケル | 『女王の夫君』 |
| H. ヒアン | 『無実の羊飼い』 |
| A. コルデス | 『説教壇下での大使の礼拝』 |
| ギー・ド・モーパッサン | 『麗しのゲオルク』 |
| フーケ | 『ウンディーネ』 |
| R. ワーグナー | 『音楽の大家についての解説』 |
| ピエール・ロティ | 『水夫』 |
| A. ヴィルブラント | 『ヒルデガルト・マールマン』 |
| シュティルゲバウアー | 『征服者』 |
| H. エンゲル | 『重荷』 |
| | 『支援』 |

マリア・フォン・エーブナー = エシッシェンバッハ

『酒』

『革命史』

ギー・ド・モーパッサン 『短編小説選集』

A. フェクトリン 『新たな良心』

L. モーレヒン 『シベリアの奴隷たち』

1909 年度版園亭カレンダー

1912 年度版ドイツ艦隊カレンダー

1909 年度版インゼル年鑑

チャールズ・ディケンズ 『デヴィッド・コッパーフールド』

ヤン・マクラレン 『ボニーの傍らで』

マックス・ペンバートン 『祖国のために』

S. R. クロケット 『アン嬢の恋』

M. C. ライトン 『ダットン市場の花嫁』

H. S. メリアン	『世代継承』
V. クロス	『自己と他者』
L. トレーシイ	『静寂の検問所』
ニック・カーターズ	『ニック・カーターズの猛烈な追跡』
M. ジェラード	『マルポール司令官』
	『公明正大な逃避』

1912年のウイニング・ポスト

1901年のウインザー・マガジン

1902/Iの //

1902/IIの //

収容所展望

ほぼ一週間、雪と雨が降り続き、われわれは収容所に閉じ込められた。浮かれた吹雪は、全てを美しい雪景色に変えようとしているように思われた。しかし寒くなったとは言っても、雪景色になるにはまだ暖かすぎた。今、周囲の山々はどんどん深い雪に被われる一方、ここでは泥がますます増えてきた。雪は長く続かず、雨が再び単調に屋根をぱらぱらと打った。長く降り続く雨のため、滅入った気分を解消できない。特に、待ち望んでいる故郷からの便りが配達されない時はそうなる。あらゆる危険から遠ざけられているわれわれにとって、郵便物が来ないといった、それ自体はたいしたことではない出来事が、ある意味で決定的な打撃となる。われわれはそうしたことと折り合わねばならない。先週の日曜日、コンサートが行われた。われわれは、故郷の小さな町で味わえる以上の楽しみを収容所内で持っていると言わなければならない。それを除けば、時間は静かに過ぎて行った。雨はなお降り続いた。しかし、何事にも終わりがあるように、雨は遂に止んだ。雨が静かに止む一方、珍客が入港した。キヨタケ丸という誇り

高き1本マストの帆船が、タグボートに曳航された。ここでは普段、唯一の比較的大きな帆船として、定期的に石炭を運ぶ3本マストの帆船が運航している。キヨタケ丸は、水夫たちの注目の的だった。垣根越しに次々とその船を覗き見た水夫たちは誰でも、自由の身になってそのような船で再び航行できたら！との願いをきっと持ったであろう。

雨天の日々が終わり、比較的長い距離の遠足が可能となった。それは吉野川を渡り、平野を通って行なわれたもので、幾人もの人がもっと好んでいた山々への遠足ではなかった。しかし、平野での遠足もまた、それなりの魅力があった。お日様はまだ耐えられ、おだやかな日差しをわれわれにくれた。平野の両側にある黒い山々の峰の連なりと、さらに背後に広がる光り輝く雪の平原を見渡すと、何の魅力もない平地を見渡す時には得られなかった気分転換をいつも感じる。ほとんどの耕作地に植えられた小麦は、すでに青々と育っていた。栽培された桑の木の葉の落ちた白っぽい枝は、春がまだこの地方にやって来ていないことを知らせてくれる。トクマ¹の神社で休憩した時、そこの住民たちが好奇心に駆られ、めったにお目にかかれない客の周りに集まって来た。帰途、チマ橋²で心ならずも小休止となった。橋の一部が取り外され、浚渫船は橋の下を通ることが出来るのだが、そうした取り外されたままの状態は、再び梁桁と厚板が乗せられ、橋が元通りになるまでしばらくの間続いた。その橋は非常に壊れやすいように思われた。というのは、その橋の資材であるたくさんの板は、ぼろぼろに朽ちたまま放って置かれていたからである。もちろん、その橋は特に重い荷重を支える必要はない。しかし、収容所の俘虜たちがしばしばそこを渡って行けば、それはやがてダメになるであろう。われわれ一人一人がゆっくりした歩みで渡っても、それはゆらゆらと揺れてすでに危険な状態になっていた。

1 吉野川周辺でこのような地名が見当たらない。おそらく徳命か。

2 詳細不明

青島での苦難に満ちた日々から（5）

隣の地下室に泊る場所を見つけたガウチャンユアンがやって来て、自分のところに泊まるよう私に勧めた。しかし、当然のことながら私は病院に留まらねばならなかった。おまけに、その地下室が安全というのは心理的なものに過ぎない。その地下室は深く、湿っぽい、天井は木材だけで造られている。

すでに暗くなり始めた時、施徳呈と劉が荷物を抱えてやって来た。用心のため私は彼らを引き返させ、別の人たちを呼び寄せた。使いの者はもはやもはや通過して来ることは出来ない。水源地山麓の砲台が炸裂したからである。

つづく



シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アン
ツアイガー』

第2巻第23号

（1916年2月
27日）

ユーモア付録

コウモリ



本当のできごと

鼠狩りや、恋い焦がれた猫と不眠症に陥った犬による夜間の安眠妨害ばかりでなく、土曜日にはコウモリ狩りといったぞくぞくするような新たな興奮を、収容所に住むわれわれは授かった。

コウモリは半分鼠で半分鳥のようなぞっとする生き物で、灰黒色

のものすごい風采をしている。それは地上が夜の帳につまれると真っ暗な隠れ家から現れ、獲物を求めて空中を疾駆し、この収容所の住人をおおいに興奮させた。その動物が偶然にも見知らぬ場所に迷い込み、かなりの勢いで天井や壁、そして窓ガラスに向かって元気はつらつと無駄な逃亡を試みるが、やがて見つかり、住人全員によるわくわくするような追い込み猟が始まった。その場合、長靴や箒等ありとあらゆる物が投てき弾に使われた。たっぷり半時間追い込み猟をした後、その安眠妨害者を逮捕することができた。誇り高きその獲物は、見たところどこか傷を負っていたようだが、今や葉巻箱のなかに納められ、不安な未来と向き合うことになった。



ただひとりで見張りに立つ

魔方陣！

L		A		E
S				E
K		R		E

真中の文字 (X) が同じ何かの文字であるとする、
次のような意味を表す 4 つの単語になる。

1. l_e 船乗り
2. k_e 家畜
3. a_r 秋の花
4. s_e ミルクを入れる鉢

アナグラム

Der Balg (その悪童) の文字を並べ換える。

この都市は、常勝のわが軍に長くは持ちこたえられなかった。

なぞなぞ！

U で始まり、4 音節を持ち

通常は見かけることがないものな～んだ

学校で

教師：疑問符はどこへ打つのかな？

生徒：ロイター報道の後です。

答えは第 24 号で